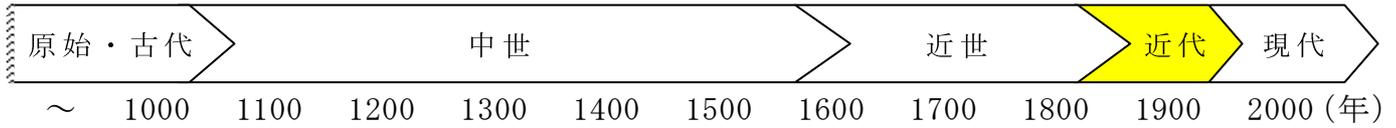


# 4 第一次世界大戦とひろしま

かとうともさぶろう  
～加藤友三郎～



## 1 加藤友三郎とはどのような人物でしょうか？

加藤友三郎（1861～1923）は、広島県出身の最初の内閣総理大臣です。

加藤は、1861（文久元）年、現在の広島市中区大手町に生まれ、幼年期には、広島藩の藩校修道館（現在の修道学園）で学び、その後、海軍兵学校に入学しました。日清戦争では、黄海海戦に参加して戦功をあげ、日露戦争では、連合艦隊の参謀長として戦艦「三笠」に乗り込み、ロシアのバルチック艦隊を破り、日本の勝利を決定付けました。

その後、海軍の様々な役職に就き、大隈重信、寺内正毅、原敬、高橋是清と四名の総理大臣のもとでは海軍大臣を務めました。そして、第一次世界大戦を経た1922（大正11）年、第21代の内閣総理大臣になるのです。

当時、日本は戦争に次々と勝利し、軍備を拡張する中であって、加藤は海軍大臣、内閣総理大臣を歴任しながら、日本の軍備縮小に力を尽くしたのです。



加藤友三郎  
(加藤友三郎顕彰会提供)



加藤友三郎は、日本が次々と戦争に勝利し、軍備拡張の声が高まる中、なぜ、軍備縮小に力を尽くしたのでしょうか？

## 2 加藤友三郎は、海軍大臣としてどのように軍備縮小を進めたのでしょうか？

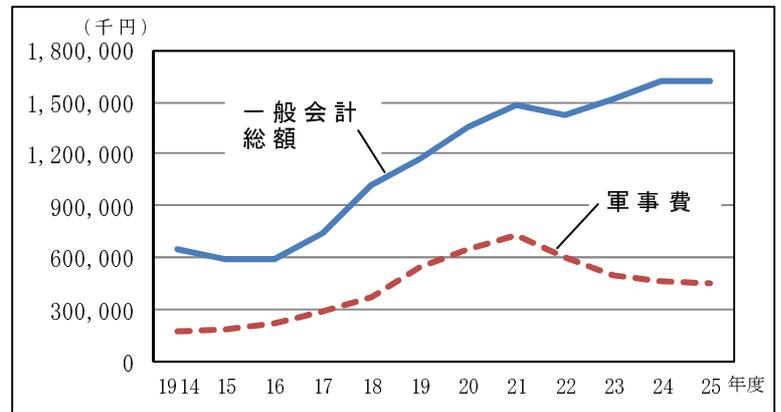
1915（大正4）年、第一次世界大戦の最中に、加藤は大隈重信内閣の海軍大臣に就任しました。1917（大正6）年、大戦は連合国の勝利で終了しますが、人類最初の世界戦争によって多くの死傷者が出ました。この反省から、世界では国際平和を求める声が高まります。

しかし、その一方で第一次世界大戦が終わった後、次なる戦争を想定し各国では軍備増強の動きが起こっていました。日本も周辺防備のため、

年	おもなできごと
1861	広島市大手町で生まれる
1865	藩校「修道館」などで学ぶ
1873	海軍兵学校に入学する
1894	日清戦争において、黄海海戦・旅順港海戦に参戦する
1904	日露戦争において、日本海海戦に連合艦隊参謀長として参戦する
1914	第一次世界大戦において、ドイツとの戦いに参戦する
1915	大隈内閣の海軍大臣に就任する
1918	寺内、原内閣の海軍大臣に就任する
1921	ワシントン会議に首席全権委員として参加する
1922	内閣総理大臣兼海軍大臣に就任する
1923	現職のまま63歳で亡くなる

加藤友三郎の年表

大幅な軍備の再編を進めました。その結果、軍事費は次第に増え、1921（大正 10）年度は軍事費が国家予算の 50% 近くを占めるといふ異常な状態になりました。欧米諸国も同様に軍備増強による財政負担が問題となっており、国際世論も軍備の縮小を求めています。



国家予算（一般会計総額）と軍事費の推移  
（『大蔵省百年史』）

このような状況のもとで、1921（大正 10）年から翌年にかけて、

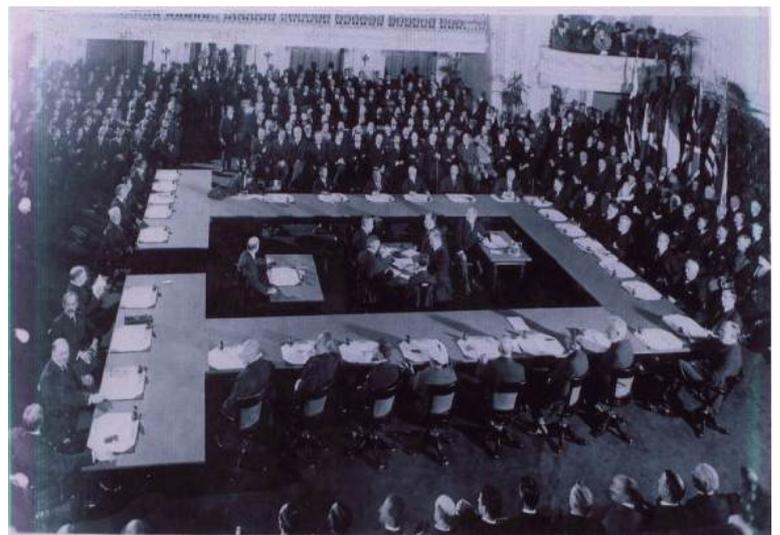
アメリカのワシントンで、海軍の軍備の制限などを話し合う会議（ワシントン会議）が開催されました。加藤はこの会議に首席全権委員として出席します。

この会議の冒頭、アメリカから「今後 10 年は主力艦の建造を行わないこと」「10 年後までにアメリカ・イギリス・日本の保有する主力艦の比率を 10:10:6 とすること（日本の保有する主力艦を、アメリカ・イギリスの 6 割にすること）」等の提案がありました。これに対して、日本国内、特に海軍内部では、7 割論が強く主張され、この会議に参加していた者の中にも「この提案は、絶対に受け入れられない。」という強硬に反対する者もいました。

しかし、加藤は次のように考えていました。

- 日本の財政規模から考えたとき、軍備拡張路線を進むべきではないこと
- 日本の歩むべき道は、アメリカ・イギリスとの対立ではなく協調の中にあること
- 国防を軍事力だけで捉えるのではなく、広く国家財政、産業、貿易、外交の面から捉える（国力の豊かさで考える）ことが大切であること

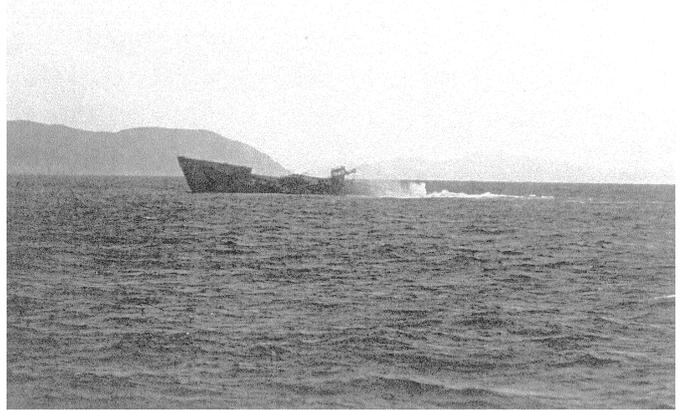
加藤は、「国防は軍人の専有物ではない。国家の繁栄があってこそ可能なのだ。」と言って、海軍内部の強い反対を抑えて会議での提案を受け入れ、「ワシントン海軍軍縮条約」に調印しました。加藤は海軍大臣という海軍の最高司令官という立場であっても、海軍のことだけを考えるのではなく、国際情勢と国益を第一に考え、内部の反対を抑えて軍縮を決断したのです。



ワシントン会議（加藤友三郎顕彰会提供）

- 3 加藤友三郎は、内閣総理大臣としてどのように軍縮を進めたのでしょうか？  
ワシントン会議を成功させた加藤は、1922（大正 11）年、第 21 代内閣総理

大臣に就任しました。加藤は海軍軍縮条約を実行し、加藤が亡くなった後も含め、1922年～1925年ごろには、戦艦の建造中止や廃棄が行われました。当時、日本が所有していた戦艦のうち、14隻は廃棄され、建造途中の戦艦6隻は建造中止や他の用途への転換となりました。右の写真は、建造途中であった戦艦「土佐」が1925（大正14）年、高知県沖で意図的に海に沈められている写真です。



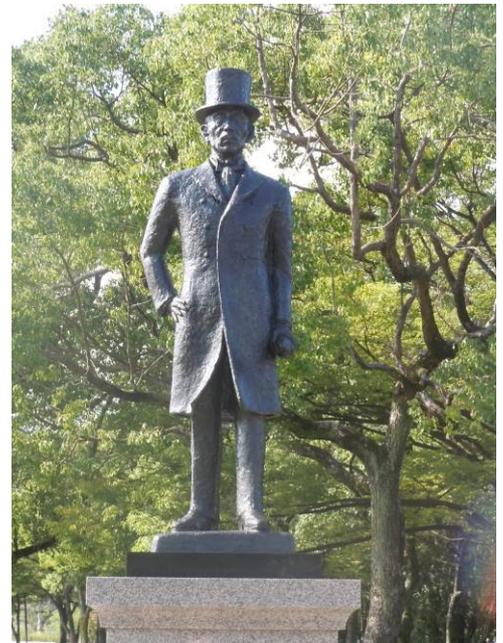
戦艦「土佐」が沈められている様子  
（大和ミュージアム提供）

また、加藤は、内外からの批判が強く、財政上も大きな負担となっていたシベリア出兵（ロシア革命に干渉するための出兵）引き揚げを行いました。さらに、海軍のみならず、陸軍の削減も行い、こうして削減された軍事費は教育・文化や国民生活の充実に向けられることになりました。

しかし、内閣総理大臣就任から1年2か月で病に倒れ、1923（大正12）年現職のまま亡くなってしまいました。加藤の死後、海軍の中では軍備拡張の考えが主流となっていきました。

1935（昭和10）年、広島市の比治山に加藤の功績を称え銅像が建立されたのですが、その銅像は、太平洋戦争中の金属回収令によって撤去され、長く石の台座を残すのみとなりました。

そして、加藤の死から85年たった2008（平成20）年、国際協調による世界平和を実現した加藤を称え、ワシントン会議に参加した時のいでたちの銅像が、再び地元の人たちの活動によって、広島市中区の中央公園の一角に建てられました。



加藤友三郎の銅像  
（広島市中区中央公園）



加藤友三郎が軍備縮小に力を尽くした理由について、調べたことや考えたことをもとに、自分の言葉でまとめてみましょう！

### 【もっと調べてみよう！郷土の歴史】

- 加藤友三郎の業績をもっと詳しく調べてみよう！
  - ・なぜ、加藤がワシントン会議に派遣されたのでしょうか。
  - ・内閣総理大臣として、軍縮以外にどのような政策を進めたのでしょうか。
  - ・第一次世界大戦の頃の日本の歴史を加藤の経歴と関連付けて考えてみよう。
- 大正時代に活躍した郷土の人物を調べてみよう！
  - ・鈴木三重吉（児童文学者）（広島市）
  - ・織田幹雄（オリンピックで、日本人初の金メダルを獲得）（海田町）
  - ・大妻コタカ（大妻女子大学創立者）（世羅町）

◇NPO法人 加藤友三郎顕彰会 HP

住所 広島市東区温品六丁目 23-14 TEL: 082-289-1082

◇広島市中区中央公園 ※加藤友三郎の銅像（功績碑）があります。

◇海田町ふるさと館 ※織田幹雄の記念品等が展示されています。

住所 安芸郡海田町畝二丁目 10-20 TEL: 082-823-8396

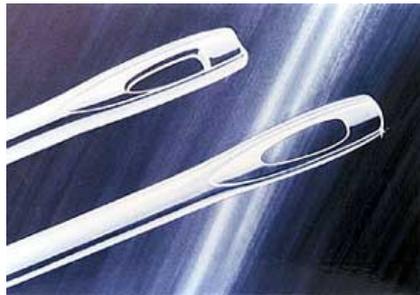
◇世羅町立甲山図書館 ※大妻コタカの伝記等の書籍があります。

住所 世羅郡世羅町西上原 123-3 TEL: 0847-22-4515

## 【もっと知りたい！郷土の歴史】

### 第一次世界大戦と広島産の産業

第一次世界大戦によって、広島産の産業は大きく発展することになりました。広島では、江戸時代に下級武士の内職として、縫い針の生産が行われていました。これは、太田川上流で行われていた、砂鉄を製鉄する「たたら製鉄」でできた鉄を加工したもので、明治初期までは全て手作業で行われていました。その後、次第に機械化が進んでいきますが、大きな転機となったのが第一次世界大戦の始まりでした。戦争によりドイツやイギリスなどの主要な針生産国の輸出が激減したため、中国をはじめとする海外からの注文が大量に日本にやってくるようになったのです。針は、東京、京都、大阪などでも生産されていましたが、広島は機械化を進め、相次ぐ増産を行い「東洋一の製針地」と呼ばれるほどになったのです。



（萬国製針（株）提供）



（チューリップ（株）提供）

昭和初期には広島産の針の生産高は日本の8～9割を占めるほどになりました。その技術と伝統は現在に引き継がれ、現在も広島産の針は国内生産の9割を占めています。

また、針が船で東アジアへ輸出されるようになると、輸出に際し、広島から針を積み込んだ船の復路が空荷になるのを避けるため、現地で採れる生ゴムを輸入品として持ち帰るようになりました。その結果、広島ではゴム産業も盛んになり、軍隊用のカップや長靴<sup>ながぐつ</sup>などが作られるようになります。このゴム産業が盛んになったのも、ゴムを縫製<sup>ほうせい</sup>するのに適した針が広島にあったからだと言われています。

第二次世界大戦後は、そのゴムを縫製する技術が生かされ、バレーボールやハンドボールなどで使われるボールや自動車のゴム部品などが作られるようになりました。現在、広島で作られたボールは国際大会の多くで使用されています。



（ミカサ（株）提供）



（モルテン（株）提供）

## 鈴木三重吉と「赤い鳥」

『鈴木三重吉賞』という賞を知っていますか。子供達の優秀な作文や詩に贈られる賞です。

鈴木三重吉（1882～1936）は、加藤友三郎と同じ時代に活躍した郷土広島出身の人物です。鈴木三重吉は1882（明治15）年、広島市猿楽町（現在の中区紙屋町）に生まれ、本川小学校、広島尋常中学校（現広島県立広島国泰寺高等学校）、第三高等学校から、東京帝国大学英文学科に入学します。大学では夏目漱石の講義を受け、卒業後多くの小説を執筆しました。自分の娘のために童話集を創作したことをきっかけに、児童文学作品を創作するようになり、1918（大正7）年、児童文芸誌『赤い鳥』を創刊しました。『赤い鳥』では、自ら作品を執筆しながら、主宰として手腕を発揮し、童謡・童話を中心に多くの名作を世に送り出しました。鈴木三重吉は「赤い鳥」の発行を通して、文学的に価値の高い読み物に触れる機会を児童に与え、児童文学の基礎を作り上げたのでした。

鈴木の13回忌にあたる1948年（昭和23）年、「鈴木三重吉賞」が創設され、毎年全国の子供達から多数の作文や詩が応募されています。



雑誌『赤い鳥』表紙  
（広島市立中央図書館提供）



鈴木三重吉  
（鈴木三重吉赤い鳥の会提供）



鈴木三重吉文学碑  
（広島市中区大手町）

右側の台座には、鈴木三重吉自筆の次の一文が刻まれています。

私は永久に夢を持つ  
ただ年少時のごとく  
ために悩むこと浅きのみ  
三重吉

左側の台座には、雑誌「赤い鳥」の表紙の字型をそのまま取って刻まれています。

おおつま  
大妻コタカ

大妻コタカ（1884～1970）は、明治から昭和を生きた教育者です。

大妻は、1884（明治 17）年、世羅郡甲山町（現世羅町）に生まれ、世羅郡教育会裁縫講習所を卒業後、広島県の裁縫教員検定試験に合格し、郡内の小学校に勤務しました。1901（明治 34）年に上京して、和洋裁縫女学校（現和洋女子大学）に入学し洋裁を学びました。さらに、東京都の教員養成所や神奈川県的女子師範学校などに学び、卒業後、東京都・神奈川県で教員となりました。その後結婚し1908（明治 41）年には、縫製・手芸の家塾を設立しました。当初は、近所の若い娘を集めた10数人の私塾でしたが、大妻の教授法は好評で、また、当時の女子教育普及の波にも乗り生徒数が増加しました。大妻は学校の設立を勧められ、1916（大正 5）年に大妻技芸学校を設立します。さらに、1919（大正 8）年には私立大妻高等女学校を、そして、日本で初めての女子勤労学生のための「大妻中等夜学校」を設立しました。1949（昭和 24）年には、現在の大妻女子大学へと発展させ、校長、学長を歴任しました。1952（昭和 27）年には、郷里の甲山町に甲山高等技芸学校を開校して校長となり、世羅郡周辺の女子教育の振興にも努めました。

大妻は、女性が高等教育を受けることが容易でなかった時代だったからこそ、働く女性のための夜学校の開設や、地方の人のための講習会の開催、講義録に基づく通信教育にもいち早く取り組み、すぐに役立つ実学を重視しました。また、大妻は、学内に寄宿舎を設け、生徒や学生らと生活を共にして日常的な礼儀作法などを教えました。

大妻は、生涯にわたって女子教育に尽くすとともに、家事評論家としても活躍します。関連雑誌の評論の他、文部省が認定した「現代裁縫全書」、「模範裁縫教科書」、「新選裁縫教科書」など裁縫・手芸に関する多くの著書があります。

- 1954（昭和 29）年 らんじゅほうしょう 藍綬褒賞受章
- 1964（昭和 39）年 くんさんとうほうかん 勲三等宝冠賞受賞（第1回生存者叙勲じょくんで女性としては初）
- 1970（昭和 45）年 じゅし 従四位勲二等瑞宝賞受賞
- 2002（平成 14）年 世羅町名誉町民授与



大妻コタカ  
(世羅町提供)



大妻コタカ女史生家（世羅郡世羅町）